

年報 Vol.10 〈巻頭言〉より

## 学会創立10周年を迎えて

中川 米造

十年一昔というが、創立事情についてはもう記憶があやしい。自分だけの事情からいうと、長く医学教育にかかわっていて、硬直した方法をなんとかしなければと思っていた。アメリカの関係文献などを読むとさかんに行動とか行動科学という言葉が現れるのに気づいてはいたが、それが具体的にどのようなものであるか、もう1つははっきりしなかった。行動科学という言葉はワトソンらの刺激-反応に焦点をあてて行動を操作する行動主義のイメージが強く、その頃関心をもっていた人間性とは反することが一因であった。

それが解消したのは、1977年シドニーの医学教師の再教育のワークショップに出席したことによってである。新しい教育理論の講義がぎっしりつまこまれるのかと、覚悟を決めて出席したのであるが、講義はほとんどなく、各地から参加した教師は、小グループに分かれて、医学教育の問題やその解決法を話し合い、また振り返りのゲームをやったり、小旅行をしたりした。さらには、みんなで料理を作ったりして2週間終えてみると、まったく自分が変わっているのを発見した。そして、そのプログラムの基礎になっていたのが、行動科学であるということを知って、本気で勉強し始めた。

また、そのようなプログラムで、様々な研修のお手伝いをしてみると、はっきりした手ごたえがあっていっそう関心をもった。そんな頃に、保健関係分野のいろいろな方々がやはり同じ関心をもつことがわかり、これはやはりみんなでやるべきだということになって、設立大会がもたれたのが10年前であった。

パラダイムが変わったのである。コロンビア大学公衆衛生学部のジャージョ教授は1975年の「社会科学と医学」学会の会長講演で、医療 (medical) という形容詞が近年、あちこちの領域で健康 (health) という言葉に代わってきたことに留意を促した。その理由として、医療そのものが根本的な変化をきたしていること、それはよくいわれるように今世紀の初めまで、死亡率の大きな部分に寄与してきた急性感染症が激減して、慢性症への対処が要求されるようになったことを指摘する。慢性症となると、ターゲットは従来のような身体内に局限された疾病に、分

業化された職能者が取り組むという対応では、それぞれが熱心になるほど多忙になり、患者を増やす結果になるというパラドクスを解決できない。さらに健康権が承認されて、インフォームドコンセントなどの主張にみられるように、患者志向が唱えられるようになると、従来の病気パラダイムではやれなくなる。病気というのは、どうしても身体内に局限され、病む者の関与・参加が不可能であること、あるいは否定することを意味するからである。身体的ということからすると、精神的なものもせいぜい二次的な位置にしかおかれなない。まして自然のおよび社会的環境の役割となると、さらに軽視されるであろう。

何よりも、それは患者が人間であることを忘れさせる。機械モデルであり、客観主義であるからである。人間は機械ではない。人間は感じ、考え、信じ、好み、嫌い、探し、理解し、価値づけ、愛し、恐れ、そして慣れたりする存在である。そうした主体的な行動にかかわるのが健康である。healthの語源はギリシャ語ホロス、つまり〈全体〉に由来する。やや逸脱するが、憲法25条にいう「健康にして文化的」は公式英文では“wholesome and cultured”となっている。

全体ということになると、とたんに科学的でない、扱えないと思う人は、狭い視野でしかものをみられない「専門家」である。確かに全体は客観的には測定できない。しかし、人間だったら、自分自身の状態については感じ、好み、価値づけ、解釈することはできるはずである。それで、自身を環境に適応させ、成長を勝ちとってきたからである。病む人、あるいはユーザーが主体になってかわれば、別に問題はない。

それが困難だとすれば、それこそが習慣になっているということである。パラダイム論の重要さは、科学的真理とされていることが、実は社会学的なものであることを指摘したことにある。そのゆえに、パラダイムという言葉の意味の曖昧さを批判されて、その概念の提唱者クーンが別のもっと明晰な言葉に換えたのにもかかわらず、そちらにはほとんど注目されずに、パラダイムという言葉はますます広がりを見せているのは、たいへん興味のあることである。

原因概念にしても、医学的な枠組の中では、自然の中にすでに存在する真理のように受けとられているが、それは外界を支配するための操作概念である。慢性症や習慣病、あるいは死のケアなどをターゲットにすると内の支配も必要になる。つまり、原因の所在は外ばかりにないとみなければならない。行動変容は、内外の両方の原因に対して気づくことから始まるのである。したがって、保健医療行動科学は、自然科学的機械論的な方法を含むだけでなく、あらゆる人間の知識技

術をつなぐ新しい生き方の中核になる。

10年前、保健・医療行動科学と名乗ったのは、まだ保健一本にしぼれない状況を気づかったからである。そろそろ健康行動科学と改称してもよいように思われるが、どうであろう。先日の選挙によって新しい役員も決定された。21世紀まであと5年、新しい形態の学会を目指して会員諸賢からの活発な御提言を期待する。それを主にしながら、11年目からの再出発をしたい。

参考) Jago, Jhon D. (1975), "Hal"-Old Word, New Task. Reflection on the word "health"and "medical". Soc. Sci. & Med. 9, p.1-6.